



コロナ禍で在宅勤務が日常的になりました。リモートワークの場合、心身を消耗させる通勤が無いのと家族との団欒が持てる点で、とても楽に感じるという声が聞かれます。一方で多くの社員の方々は、でも業務上は

やはり顔を会わさないと難しいとも仰います。細かいニュアンスなどは、やはり対面しなければ伝わりにくいということです。確かにリモート会議等で物理的な距離の壁は克服されました。しかし逆に人と人との間、すなわち人間（じんかん）は広がってしまったようです。医療の場でも国はリモート診療を推奨していますが、思ったほど導入されていないといいます。近隣に医療施設がない地域では、遠隔での診療がどれ程ありがたいことかは容易に想像されます。しかし人と人とのやり取りである診療は、対面式でなければうまく運ばないことを、多くの臨床医は痛いほど分かっているのです。AI の時代を迎えても、やはり人間関係は対面が原則であることは変わり様がないと考えています。

棋士の谷川浩司さんが、囲碁には国際大会などリモートでの対戦があるのに、なぜ将棋にはそれが無いのかという質問を受けて、「将棋は日本固有のものであり、和室に和服を着て相手と対面するという流儀がある。古臭いかもしれないが、そこは譲れない」というようなお返事をされていたのが印象に残っています。単に可視的、制度的なことを仰ったのではなく、将棋という勝負事の背後に脈打つ精神性を重視されているのだと思います。例えば今や国際的なスポーツとなった柔道は、本来の道を失ってしまった感が否めません。単なる勝ち負けの狂騒に墮落してしまったように映るのです。勝負である限り勝つことを目指すのは当然ですが、谷川さんが究めんとする棋士道は、勝ち負けの現実世界を超越した達人の道なのでしょう。環境と装いを整え相手と対峙して初めて自分が「在る」、すなわち相手とのやり取りの中にいのちを実感する、というお考えをお持ちなのかと想像いたします。

近代に入り当初西洋思想が確立しようと試みた世界観は、自分の目に映ったものが「世界」であるという、個人の個人的な認識を哲学の出発点に据える思想でした。そうしたなか個人としての人間ではなく、人間と共存する人間という新たな視点に立脚し、二人称の存在を前提とする人間観が創造され始めました。そしてその思想を展開させて、上記のような

独白の人間観に対して、汝と我の関係性における対話的人間観を創始したのが、オーストリア出身の思想家マルティン・ブーバーです。ブーバーは人間とは何であるかという問いに対して、「個人の考察から答えを見出すことはできない。むしろすべての存在への関わりの考察を通してのみ答えられる」と述べています。例えば雑踏の中で見知らぬ者と一瞬視線が会い、次の瞬間にはそのこと自体を忘れるような小事でも、そのような汝と我が出会う「間」の中に個人は規定され、世界の中に位置づけられると彼は考えたのです。

ブーバーの思想は社会に広く影響を与えました。一例として生物学を挙げると、動物の生態を扱う場面では、どうしても主体である動物を中心に考えがちです。その動物は何を食べるのか、どこをめぐらとするのか、等々。しかし地球上の生物多様性を説明するとき、例えば「A という植物があるから a という昆虫が存在する」というように、現在では環境があつての主体という捉え方が一般的です。つまり動物は生物学の中で脇役になったのです。人間も例外ではなく、汝を含むさまざまな因子で構成された環境内部で、関係性を維持しつつ個性化した存在として実在していると捉えられます。汝と我というブーバーの思想は、多岐に亘る分野で活用される哲学的手法「現象学」にも包含されて、生物学に限らず思いのほか現代社会の中に息づいているように思えます。谷川さんにおいて譲ることの出来ない棋士道も、正にブーバーの考えに寸分違わぬ人間学的姿勢ではないでしょうか。

在宅勤務がどれほど楽でも、私たちは画面上の相手ではなく実在する汝を探し求めます。しかし入社して会話を促進させたり、ためらいながらもサークルや居酒屋に集うのは、巣ごもりの不自由さや独り身の寂しさだけによるとは思えません。恐らく私たちが見失っているのが、汝というよりも我だからだと考えます。自粛生活で我を見出せなくなった私たちは、棋士道のように汝と対面し、汝の対応に喜怒哀楽する感情の中に我を再認識しようと渴望するのです。このように考える私は、家族にコロナをうつしてしまった若者の感染理由が、友人らとの飲み会だったとしても、とがめることが出来ないでいます。なぜならば、汝という鏡を失った我の結末は、無差別殺人等で世を震撼させる犯人の狂気に明らかだからです。